

様式 1

完了報告書（平成 25 年度）

提出者 胡 正怡

提出年月日

【プロジェクト名】

和文 江戸古文辞派の漢詩と唐詩

英文 A comparative study on the Chinese poetry of Kobunjiha in the Edo period and the Tang poetry.

【メンバー構成】

研究代表者 胡 正怡

幹事

メンバー

【研究のねらいと目的】（600 字程度）

日本では古くから漢詩文が作られてきたが、江戸中期に荻生徂徠を始めとする古文辞派の登場により、その作り方が大きく変化した。古文辞派は明の古文辞派の影響を強く受け、「文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐」という文学観を掲げ、一世を風靡した。一方、唐詩の言葉を強く意識するため、古文辞派の詩は、後世、唐詩の模倣であるとされ、高く評価されてこなかった。

しかし、古文辞派の詩は一見唐詩らしく見えるが、その根底には日本的な発想が潜んでいる。従来注目されてこなかったが、古文辞派の人々は和歌や日本の古典の知識を十分に持っており、それを従来の和習とやや異なる独特な形で詩に詠み込んだと考えられるのである。古文辞派の詩における日本的な要素を研究することによって、日本漢詩における中国的なもの、日本的なものとは何かを明らかにし、アジアの漢文脈における日本漢詩の位置付けを行うことを目的とする。

従って、本研究は『伊勢物語』を取り入れた詩を例として、具体的に唐詩模倣を強く意識した古文辞派の詩に日本の要素をどのように取り入れられるかを考察した。それを検討することによって、古文辞派の詩に於ける和と漢という概念と、さらに古文辞派の詩に反映される文学観を明らかにしたい。

【活動の記録】

11月5日 国文学会のプレ発表として授業で発表

12月7日 京都大学国文学会で発表

2月21日 次世代研究プロジェクトの研究経過報告会にて発表

1月から3月 論文執筆

【成果の概要】（800字程度）

唐詩を模倣する方法を強く意識する古文辞派は、実は『伊勢物語』など日本の古典を詩に読み込むことがある。杜若洲・墨水（八橋・隅田川）など『伊勢物語』に関係する名所を読む古文辞派の詩では、王孫と春草という組み合わせが多用される。天皇の孫である業平を王孫と表現するのが理解できるが、注意すべきは夏に咲く杜若の詩に、春草という言葉が使用されることである。その表現を調べると、王孫と春草という組み合わせは、唐詩では極く一般的な表現であり、離情を吟じる際によく使用される。元となった典拠は『楚辞』招隠士である。杜若洲・墨水の詩を創作する際、唐詩に留まらず、古文辞派の詩人は原典である『楚辞』をも意識し、業平と屈原を重ねて理解していると考えられる。

業平と屈原が類似しているとは、朱子学者にも、現代の国文学者にも見られる考えであるが、古文辞派は、『伊勢物語』を典拠にしつつ、唐詩・『楚辞』の言葉を使用することによって、詩に重層的意味をもたらしている。このような表現の手法は、和と漢の人情が同じという「和漢同情」の思想に基づくものだと、本研究によって指摘できた。「和漢同情」という文学観が前提としてあれば、理論上、漢詩という枠組みの中に漢の言葉を用いて、和の人情を十分に表現することが可能になる。『伊勢物語』を描写するとき『楚辞』の言葉を利用したそれらの詩は、「和漢同情」を実現しようとする試みだったのではないだろうか。

さらに、和漢同情という観点からみると、古文辞派が唐詩の模倣のような詩を作ることは、ある種の正当性を持っているようにも解釈できる。和も漢も、その根底にある人情は同じであれば、人情を表現するための手段である模倣は、形式通りの漢の人情だけではなく、和の人情をも表現することが可能になる。和漢同情という文学観は、古文辞派の詩を考える上で、必要で不可欠の概念であると指摘した。

【研究業績】

2013年12月7日

京都大学国文学会にて「古文辞派の詩における和と漢—『伊勢物語』九段と『楚辞』—」を題として発表した。

【通信欄】